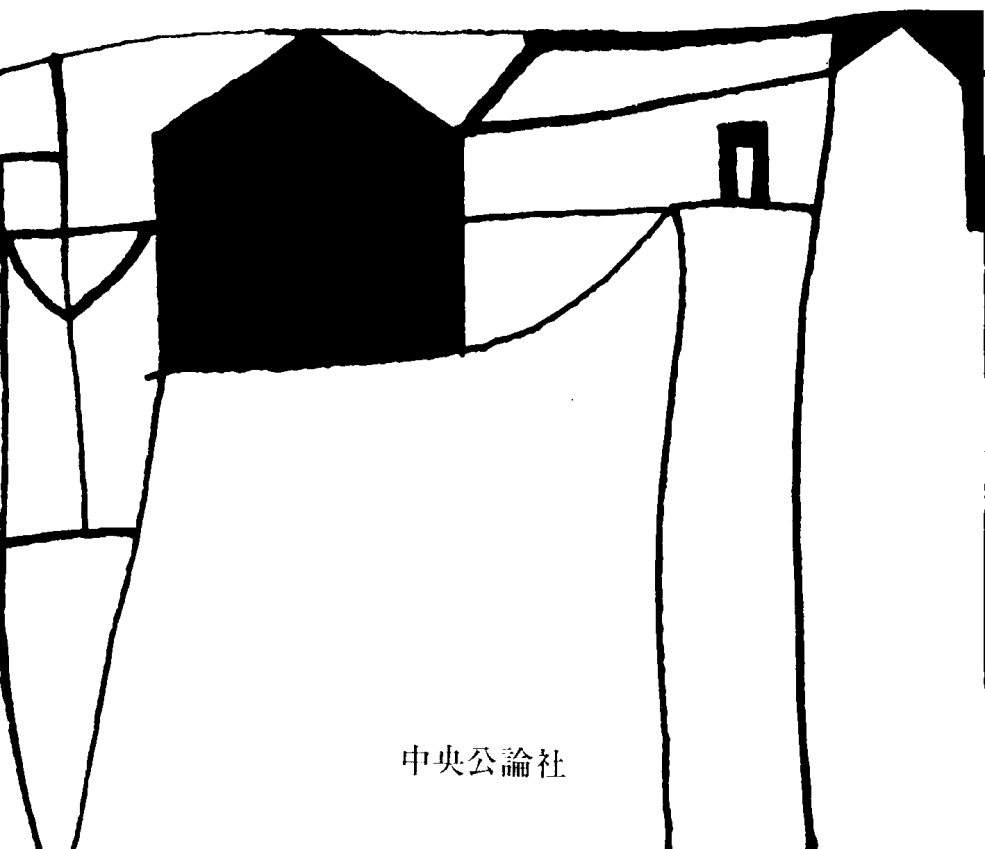


人生の一日

阿部 昭



中央公論社

人生の一日

昭和五十一年七月十五日初版印刷
昭和五十一年七月二十五日初版発行

著者 阿部 昭

発行者 高梨 茂

本文印刷 三晃印刷
多色印刷 大熊整美堂
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二丁目
電話 五六二一五九二一
振替 東京二二三四
©一九七六 検印廃止

人生の一日
目次

人生の一日

7

天使が見たもの

29

息子の時代

53

帰ってきた日記

81

水のほとりで

115

わたしたちの愛

149

ささやかな結末

179

あとがき

209

装幀 大沢昌助

人生の一日

人生の一日

その日は終日、海の風がようやく吹いた。冬にはいく日もそういう日がつづくのだ。

私は二階の部屋をあたためて、ひとり室内の日陰にうずくまっていた。海に向いたほうの雨戸はあけることができなかった。戸板にも屋根のトタン葺きの個所にも、捲きあげられた砂粒がばらばらとあたる音がたえずした。

その音がいくらしでも耳から払いのけられないような落ちつかない気分だった。私は頭上に雲がひとつもなく冬の日ざしが澄んでいるのがねたましかった。またその光の下で、自分の生活というものがそろそろと海の砂に埋まって行くようにも感じられた。

しかし東側の窓からは、見ようとのおもえば戸外の景色がながめられた。海ぞいの松林やひしめく屋根屋根やそのむこうの低い丘みtainなものが望まれた。もう何ひとつこの私をおどろか

すものを持っていない、見なれた、うっとりうしい海辺の町……。

だから私はめったに遠くへ目をやることはなかった。せいぜい立ちあがったついでに隣の敷地をのぞきこむぐらいで、そこにはまるでおもちゃのような別荘小屋が一つ、草のなかにくずれかかっていた。一年じゅうほとんど人が出入りするのを見たことがなく、濡れ縁の隙間や玄関の戸口のコンクリートのまぎわにまで高い草が生いしげっていた。

眼下の冬枯れた草むらは、こういう風の日には、吹きつけられ押し倒されて、しのび歩いてゆく狼の背中か何かのようにしなやかに、平らかになびきつづけるのだった。またそのようにして私が生きている場所のまわりをも海の風が一日吹きめぐっているのだった。

そんな午後、さむい風のなかを、小さな男の子をつれた中年の婦人がやってきて、階下のドアをたたいた。日頃ほとんど来客のない私は、また集金人か町内会の回覧板でもまわってきたのだろうと思いついておろりで行った。

母親はこの寒空に薄いカーディガンを一枚はおっただけのみすぼらしい恰好で、小学二年生ぐらいの息子も半ズボンの脚をむきだしにして、いかにもさむそうだった。ただ母親はそれでもちっとも寒くはないというきつい顔をしているのに、男の子はドアをあけてやるとからだをまるめて自分から先に玄関口にもぐりこんできた。

母親は度の強そうな眼鏡の奥で、私にあいまいに笑ってみせてから、息子の肩をちょっと押し出すようにして、「さあ……」と言った。

すると、男の子が手にしたチラシのようなものを私に差し出して、機械的にやりだした。

「わたくしたちは、このお仕事をつうじて……」

それはよく仕込まれた幼い動物の平凡な芸当を見るようなぐあいだった。

しかし私はチラシをうけとりもせず、男の子の口上を聞きもしなかった。私は言葉にならない声を発して、即座にさえぎってしまったから。

それならもう知っている、というつもりだった。年に二、三回やってくる「あの人達」の仲間だろう。そのチラシも前に貰ったことがあるし、ざっと目を通したこともある。……その日××が来たりたもうて世を新しくしたもう。涙も苦しみも悲しみもなかるべし。……

男の子は私の剣幕にあわてて口をつぐんでしまった。そしていきなり平手打ちでもくらったみたいに、キョトンとして私を見あげたが、すぐに眼を伏せるともう私の顔を見ようとしない。その眼は、どうして？ とたずねるよりも、自分の喋りかたがまずかったかなと自問しているように見えた。あるいは、これからまた寒いおもてへ出て、何軒も別の家をまわらなくっちゃいけないのかと考えているようでもあった。

息子がうつむいてしまったので、母親は一步すすみ出てその手からチラシをとりあげ、あらためて私に差し出して、

「二部で五十円なんです」と言った。

私は自分が爆発するのをおさえるために、不自然な笑顔をつくってみせなければならなかった。まさかこの母親は自分の子供を猿回しのように鞭で仕込んであるわけでもあるまい。そんなひどい女にはとても見えない。けれどもなぜ子供を巻きぞえにするのだろう。大人から口うつしに覚えさせられたわけのわからない文句を、意味もわからずにただ復唱しているような、こんな子供を。男の子のほうは寒風のなかをあてもなく歩かされて、もうこんな仕事にはうんざりしているにちがいないのに。

私がむきになったのには、もう一つの理由もないではなかった。この婦人とはまた別の「活動」でやはり子供を巻きぞえにしていた若い母親を私は知っていた。

彼女のほうは、いま目の前にいる婦人とは反対に、自らの信ずるところにしたがって終日カーテンを締めきって家にこもり、隣近所の誰とも口をきかなくなっていた。それはまあいいだろう、自分ひとりがそうするのなら。ところが彼女は家じゅうの鍵をかけてしまって、二人の幼児をも閉じこめ、いっさい外へ出さなかった。子供たちは仕方なく窓のカーテンと格子のあ

いだから、一日外を見ていた。五歳に三歳ぐらいの兄妹で、もちろん幼稚園などへは行かれもしなかったろう。

父親は自分で事業をしていて忙しく、毎日東奔西走していたが、それでも留守中のことが心配で毎日一回は出先から隣の家へ電話をかけてきて、その主婦に家のようすを見てもらっていた。家の電話が鳴っても細君はぜったいに出ようとしないからだ。

閉じこめられた子供たちは、通りかかった近所の人達が窓ごしに話しかけてやると、とてもよろこぶのだった。なかには母親に見つからないように格子のあいだからそっとおやつを差入れてやる人もいた。

私はといえば、月に何度かは必要があってその家の前を通っていたが、どういふものか二人の子供の姿を見たことはなかった。狭くらしい路地に面した軒の低い古い借家ふうのつくりだから、のぞこうとおもえばたやすくのぞかれもしたろう。

しかし窓にカーテンが引かれて、家の中が見えない時でも、子供たちがいるらしい気配だけはわかった。二人の声はしなくても、グラスのふちをたたくような明るく澄んだ音がしていた。それはよくある安物の玩具のピアノの音だった。私はその構造と音色をよく知っていたから。

それは実際にはガラスなんかで出来ているのではなかった。ちゃん鉄の棒みたいなものを

木のハンマーが打ちおろすだけの、ひどく粗雑な仕掛けにすぎない。乱暴に叩けばひずんで濁った音がするが、幼児のちっちゃな手が無心にふれると、グラスをはじいたような高く澄んだひびきを立てることもあるのだった。

そのためらいがちな、片言のつぶやきに似たピアノの音がとぎれとぎれにするので、私は忘れていても相変らず二人の子供がそこに閉じこめられていることに気づくようなくあいだったのだ。

子供たちにとってはなんと永い月日だったろう。私はけっきょく二人の顔を見なかったが、そのほうがよかった。ある日、若い母親は、みんながおそれていたことを、とうとうやってしまった。誰もそれをとめることはできなかった。彼女が病気なのだとしても、誰もそれをなおしてやることはできなかったのだ。

「二部一と組で五十円なんですけど、おいやなら一部でも……」

そう言っている間に私にチラシを差し出しているこの婦人なら、あんなことはやらないだろう。第一、そんな病人といっしょにされては迷惑だろう。彼女には私が話せばどんなことでもわかってくれそうな、聡明そうなところがないでもなかった。しかし私は彼女が男の子とちがってなかなか後に退きそうもないので、おもわず最後のせりふを口にしていた。